

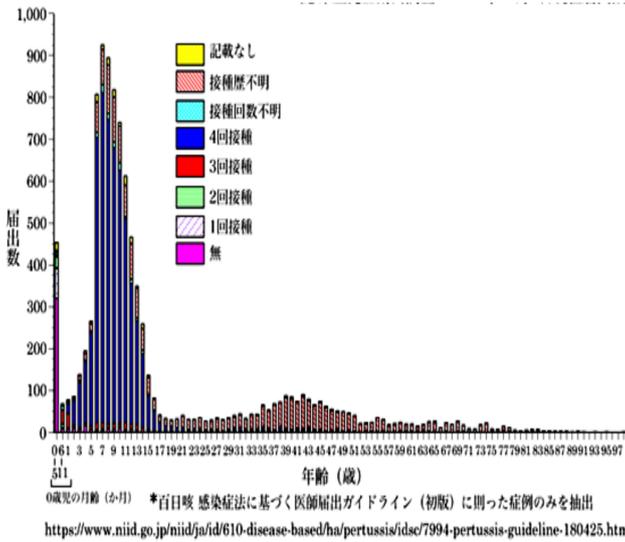
おとなのワクチン第7回 「百日咳ワクチン」



講師
宮田智仁
副院長



みなさんこんにちは。
今回は「百日咳ワクチン」の話をしてします。



1歳未満の子どもが重症化

この病気は1歳未満の小児では急性気管支炎になり重症化する事が知られていますが、成人の場合には、長引く咳のみ重症化することは基本的にはありません。

百日咳菌による感染症で、百日咳菌は患者の飛沫または接触によって感染します。感染して1-2週間後に風邪症状を呈する力タル期を経て、特徴的な咳嗽を認める痙咳期に移行し3-6週で回復期に至る病気です。

つまりは、この百日咳は1歳未満の子供たちがかかると重症化するのでこの子たちに感染しないようにするのが最も大切な事です。

百日咳ワクチンは、第一期として破傷風・ジフテリア・不活化ポリオワクチンを加えた四種混合ワクチンを生後3か月目から連続して概ね毎月3回接種をします。そして大体1歳になったときに4回目の接種をします。

4回も接種するこのワクチンですが、実は、5-6歳ごろになると抗体価が低下してくることが分かっています。

この世代の子供たちが中心になっています。(図1)。

幼稚園・小学校の中で流行するわけですね。その世代の子供たちの流行がやはり効

赤ちゃんを守るためのワクチン接種

果の乏しくなっているご両親世代にも波及して、おとなたちの間でも流行をするのです。

図1ではおとな世代の感染が少なくないように見えますが、内科医をしている私の実感ですが、症状が軽く、また診断が難しいので診断できていない症例がたくさんあると思っています。

ですので、感染者数は報告の何倍もいるわけですね。「盲落として大丈夫？」と思われたかもしれませぬが、前述したとおりにおとなが感染してもあまり重篤にはなりませんので、おとな自体は感染してもどうという事はないのです。

では、なぜ百日咳ワクチンをおとなに薦めるのかというと、それはズバリ、赤ちゃんを守るためです。図1をみると分かりますが、生後0-5か月の赤ちゃんにも感染の山があります。この子たちが、自分上の兄弟やご両親から百日咳をもらってしまつたのです。

次回は、子宮頸がんワクチンのお話をしたいと思います。

そして赤ちゃんにとつて、百日咳は重症化し死に至ることがある病気なのです。守ってあげる必要があります。米国では、出産を終えたお母さんは退院するときに百日咳ワクチンを接種するようになっています。

近年、小児科学会では5-7歳のお子さんにも追加で百日咳予防のためワクチンを接種することを薦めています。それもまだ任意接種であり普及していないのが実情です。

自分が感染者になり、大切な誰かに病気を移してしまう恐怖は、今回の新型コロナウイルス感染症で皆さん実感していると思われまふ。百日咳も同様です。自分の感染が大切な赤ちゃんを危険にさらす。これは避けられないかもしれません。コロナとは異なり百日咳にはワクチンがあります。

新しい命が生まれてくるご家庭においては、ご両親とお兄ちゃん・お姉ちゃんにはワクチン接種をお勧めします。